



告知日に開いた“幸せへの扉”

〈京都府〉小野田 真由美 40歳

乳房の中に、小さな丸い塊を感じたのは、ハロウィーンの夜のことでした。

検査から1週間後。診察室で主治医から差し出された紙には、英単語が書かれ「これは悪性腫瘍という意味です」とストレートに伝えられました。不思議と涙が出ることはありませんでした。

「このことを知ったら、離れて暮らす両親の方が落ち込んで病気になってしまうのでは」。そんなふうに考えながら部屋を出ると、看護師さんが別室に案内してくれました。私と向き合ったその看護師さんは、開口一番。

「この先、何より大切にしなければならぬことは何か分かる？」

「体ですか……」

「それは、幸せになることよ」

告知を受けた直後です。幸せから一番遠い所に立たされたはずの私に、

看護師さんは穏やかにほほ笑みながら続けます。

「仕事も、好きなお酒も大きく変えなくていいから、これからは、今まで以上にいっぱい笑って幸せになつて悪いものをやっつけましょうね」

それは、治療をしながら生きていく私に覚悟をくれた魔法の言葉でした。手術の前日。見た人に幸せが訪れるという大きな虹が、私の町にかかりました。家族に支えられ、仕事を休むことなく「ここまでがんばってきたなあ」と思いながら手術台の上から天井を眺めていると、2人の看護師さんが、私の右手と左手をそっと握ってくれました。その瞬間。その手の温かさに、涙がポロポロこぼれてきました。

「大丈夫？ 何か不安？」

「違うんです。うれしくて。人の手って、

こんなに温かかったですか」

「こんなにふうに泣いてくれた人は、初めてよ」。麻酔で薄れゆく記憶の中、つながる手のぬくもりを感じながら、私は心の中でこんな会話をしていました。

「あなたは、幸せになることを誓いますか？」「はい、誓います」と。ハッピーへのリスタートをきった手術から、2年。看護師さんたちがくれた「幸せ」とぬくもりが、今も私の血管を巡り、胸の中の細胞を元氣付けてくれています。